

**特別講演**

座長： 白井聖仁会病院 布施 秀樹

**「医心方」に学ぶEDに関する漢方治療**武蔵野徳洲会病院 泌尿器科  
小川 由英

丹波康頼が隋唐以前の中国の200以上の書物から選出して、医心方30巻を編纂し、朝廷に献上した我が国での最古の医学全書である(984年)。房中術(男女の営み)に関する内容を1章(房内篇)とし、古代の貴族社会に珍重され、宮中に秘蔵され、名医半井瑞策に下賜され、半井家の家宝とされた。江戸幕府の命により、半井氏が貸し出しに応じたのが1854年で、貝原益軒(養生訓1713年)が医心方を参考とした可能性は低い。その後復刻本が刊行された。数多くの伝写本が作られ、多くの人々の好奇心を引き付けた。房内篇が倫理、道徳、風俗に及ぼした影響は少なくないが、オランダ医学が伝来するまで、長い間漢方医学が医療の中心であり、医心方は人々の健康と民族の繁栄に果たした役割は大きく、仁和寺本が国宝に指定されている。

本書の理論の根底は、陰陽五行説に基づき、易や道教、陰陽道、天文学などにより人の行動が規制されていた。性に関する禁忌は、気象、天変地異、場所、心身の状態など多岐にわたり、禁を犯せば病気になる、老化や死を早め、災害を受け、子孫に害が及ぶとされていた。その頃、清少納言が枕草子を世に出し(1000年頃)、紫式部の源氏物語が成立した(1008年頃)。「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」と詠んだ藤原道長にみられる自由奔放そうな平安貴族の恋は意外に窮屈だったのかも知れない。

邪馬台国、大和朝廷、南北朝まで母系制が根強く、女性は自主性を持ち、九世紀ころまで妻の性愛関係は自由度があり、男女の合意のもとに成り立っていた。中国の律令制度が導入され、男女関係には不平等が芽生えていた。医心方は男性中心の時代の産物であるが、心の融合の大切さを説いている。即ち、男女は心から打ち解け和やかに睦み合い、求め合わねばならないとし、無理やりに相手を従わせることを戒めている。体力の個人差、年齢による相違もあり、体力気力をわきまえずに快楽を求めると、身体のどこかを損なうとしている。性行為により、男性は七つの損傷(七損)と八つの恩恵(八益)を受けるとしている。「七損」について、絶気、溢精、奪脈、気泄、機関厥傷、百閉、血竭などがあり、「八益」とは固精、安気、利臍、強骨、調脈、蓄血、益液、道体などである。これらをそれぞれ解説し、その漢方治療にも言及したい。

おわりに、中国古代の専門書(素女経、玄女経)が遣隋唐使により持ち込まれ、仙人へのあこがれや神仙となった道教伝説があったが、房中術を不老長寿や仙道修行に取り入れは一般化しなかった。本書が貴族社会の文化形成にある程度の影響を与え、房中知識を医学的に浸透させたことは類をみない貢献と考えられる。EDの専門医およびそれを目指される皆様は一度本書に触れて、古代のロマンに夢を馳せてみてはいかがでしょうか。